

人権センター叢書 vol.34

水俣病 ——被害体験と加害構造

小笹 恵
実川 悠太



大谷大学人権センター

表紙の絵は、生涯、「南部古代型染」という伝統的な染色工芸の道を歩まれた、故小野三郎氏の「本願の笛」である。

「私には絵の素質がきわめて薄い、見る（鑑賞）ことは人一倍好きである。見たり聞いたりすることは、商売柄まことに必要であるし、どんなに下手でも、直し直し間に合わせて描いてはいるが、花鳥はどうしても得意技ではなく、あまり進んで描いてはいない。子供の絵となると、瞬間に一筆で描いてしまう。もちろんまずい絵ではあるに違いないが、可愛らしい絵にちかく描かれているから、自分でも秘かに笑いがでてくる。君の絵のモデルはと聞かれるが、十何人も群がる孫達のことですもの、どの顔がモデルでしょうと答えるが、しまいに仏様の顔になっっている。お経の話のなかにでてこられる、弥勒菩薩にせよ、善財童子にせよ、仏様につくられるお顔が、なんと柔和のことよと、思わず自分の顔も微笑みももれるようになる。私が童子、童女のお顔を描くときは、自分もそうした表情になっっているだろうと、思うのである。」（『南部古代型染一代』牧野出版より）

「本願の笛」の音は、十方に響流し、人間の自由と平等を願いとす仏の心を奏でている。そしてその願いに生きよと呼びかけている。

人権センター叢書 vol.34

水俣病
——被害体験と加害構造

小笹 恵
実川 悠太

大谷大学人権センター

はじめに

本学では人権教育を重視し、さまざまな取り組みを進めています。その大きな柱として、新入生対象の必修科目「人間学Ⅰ」の開講があります。「人間学Ⅰ」の授業では、『差別のない世界を求めて』をテキストに、新入生全員が部落差別の問題、釈尊・親鸞の精神を学ぶことを通して自分たち自身の「差別する心」と向き合います。もう一つの柱が本学人権センター主催による学習会の開催です。すべての教職員・学生が対象の「人権問題を共に考えよう」全学学習会（春・秋二回）と「教職員を対象とする人権問題学習会」（秋一回）の年三回開催しています。

本書は二〇二五年度第一回「人権問題を共に考えよう」全学学習会の講演録です。講演いただいたのは、水俣病患者で元水俣病関西訴訟原告の小笹恵さんと水俣フォーラム理事長の実川悠太さんです。

小笹さんの講演では、生まれ育った島の暮らし、「水俣」への転居とそこで感じた水俣病への差別、原因企業である「チッソ」への住民のまなざし、さらには、大阪への転居後に関西

訴訟の原告となる決意までの出来事。そして、今も日々続く痛みとの戦いなどの苛烈な人生を語っていただきました。水俣病患者の受けた差別の実相がひしひしと伝わる内容となっています。

また、実川さんからは小笹さんの話のバックボーンとなっている水俣病の歴史的背景について、詳しく解説をいただきました。

公演参加者からは「水俣病は知っていたが実際に水俣病の方の話を聞くのは初めてで衝撃を受けた」、「自分たちの生活を便利にする身近な製品の製造過程でこのような被害が発生していることに気づかされた」、などの感想がよせられました。

この講演録は、講演と質疑応答など当日の様子を文字に起こしたものを元に加筆していただき、さらに正確かつ分かりやすくしていただきました。多くの方にお読みいただき、人権問題に対する学習が広がりますよう、心より願っております。

大谷大学人権センター長 志 藤 修 史

水俣病——被害体験と加害構造

目次

父母と私の水俣病との闘い

小笹 恵

流産やお葬式がやけに増えて	三
多発地帯と知らずに移住	六
みんな具合悪くなっても	九
一生懸命に隠して	一一
父に誰が謝るのか	一四
自分を卑下する生活から	一七
人の三倍努力して	二〇

水俣病の発生原因と私たち

実川 悠太

水俣病は治らない……………二二

胎児性という警告……………二五

チツソを誘致した水俣……………二八

苛烈な差別・偏見・敵視のもと……………三一

私たちも加害者だった……………三三

私たちも被害者に……………三六

科学文明を見直すためにも……………三八

(司会)

本日は、足元が悪くなってきましたところをお集りいただきましてありがとうございます。
私は、大谷大学人権センター長の志藤と申します。これから「人権問題を共に考えよう全学学習会」を開催いたします。本学ではこのような人権問題学習会を年二回開催しておりますが、今回はその第一回目となります。それでは開催にあたりまして、人権委員長の平野副学長よりご挨拶いたします。

(平野人権委員長)

失礼いたします。遅くからたくさんお集りいただきありがとうございます。今日の全学人権学習会は、すでに五月と六月の教授会でも先生方に伝えまして、全学的にアナウンスしているのですが、ちょうど五月の教授会の後だったと思いますけれども、ある家庭教師塾のオンラインの教材で、水俣病に関する誤った内容が記載されているという報道がありましたことは、皆さんご存知かと思います。その報道を見ましたときに、今回こうした勉強会をするということ、少し前の資料を調べてみたのですが、これは一教育企業の見識の問題では済

まないのではないかと思いました。水俣病の、事件が発覚してすでに六九年も過ぎていますが、その間に、水俣病に関する知識や情報が十分に共有されてきたのか、また教育の場において、それが十分になされてきたのかということを改めて考えさせられました。高校の教科書「日本史B」、最近少し名前が変わりましたが、そちらの方では高度経済成長のひずみ、産業公害という中で、水俣病などを四大公害として、ほんの半ページほど取り上げています。ただそこには、今回ある塾が誤った認識をテキストで使っていたわけですけれども、そこまでの記載はありませんでした。そうした高校教科書でも十分な情報、知識が載せられていないということも、教育に携わる者として改めて考えさせられたところです。

本日はお二方の講師をお招きしております。お一人は小笹恵様。もうお一人は実川悠太様。お二方とも長い間この水俣病の問題にいろんな形で携わっていらした方で、本日は「公害と人権」ということで、具体的には水俣病を取り上げて、皆さんと一緒に学習をしていきたいと思います。それではどうぞ最後までご静聴の程よろしく願います。

(司会)

早速ですが、今回は「水俣病——被害体験と加害構造」というタイトルで小笹恵さん、実川悠太さんにお話いただこうと思います。それではお二人、ご登壇お願いいたします。

(小笹)

こんばんは、小笹です。ちゃんと話せるか自信ありませんけど、よろしくお願いします。

流産やお葬式がやけに増えて

私は一九五三年に水俣市の対岸にある獅子島という小さな島で生まれました。水俣まで二時間ほどかかる三馬力の小さな船で父が魚を卸しに行っていましたので、水俣というのは遠い街だと思っていたんです。今は高速船で一〇分か一五分で着くみたいですが。

獅子島は小さな島で島の周りに畑があって、山と海との間を切り開いたところに部落が点在しています、私は湯ノ口という部落で、ちょうど水俣のまっすぐ対岸、船をこげば着く

ような所にある部落でした。三〇軒ほどしか家がなくて、漁業中心で残った時間は畑をするような半農半漁の村で、私は六人兄弟の長女として生まれました。お爺さんお婆さん、お父さんお母さん、小父さん小母さんもいる、十何人家族の中で育ちました。村は車も通れないような道しかなくて、それこそ田んぼもないですから、魚の他は麦とサツマイモで、あとはちよつとした野菜を作つて暮らしているような所です。だから麦の中に、買ったお米がちよつと入っているようなご飯で、サツマイモが朝と昼の食事みたいな暮らしです。

うちの前は湾なので、夏に大きな船が通ると船に追われてカタクチイワシがものすごく打ち上げられてくるんです。それをザルですくつて一年分の塩辛にするんです。干してジャコやイリコにしたりもしますが、塩辛はほとんど一年分になります。それとサツマイモが合うと言うんですが、子供の私は塩辛が嫌いでした。お店が一軒もありませんし、カボチャがあればカボチャばかり、サツマイモがあればサツマイモばかり食べていました。

父親や村の人たちが、魚を卸しに水俣や天草の牛深に行く船に乗つて水俣に行くと、大都会のような凄い町でした。車も自転車も見ることがなかったですから。でも島にいても水俣の方から風が吹いたら臭い煙がくるんです。そしてたまには水俣を走る蒸気機関車の音がボー

ボーって聞こえてくるんです。子どもながらに汽車って、電車ってどんなやろうねって話してました。あの頃はまだ楽しかったですね。秋になると山はツツジで真っ赤かに染まって、冬は水仙のいい匂いがして、私は島が大好きでした。

小学校の一年と二年は湯の口分校で一年と二年がクラス、三年と四年がクラス、それで五年生になったら、山を越えて島の裏にある御所浦という部落の本校に行かなくちゃいけなかったんです。でも、ほとんどの子が山の途中で遊んで学校に行かなかったんで、たまりかねて五年生の時にスクールボートができました。島の各地の子どもを乗せて本校に連れて行くんですが、それも嫌だったですね。でも湯ノ口にいるときは楽しかったです。

その頃は、魚に水銀が入ってるなんて全然知らなかったんです。島にはまだラジオもテレビもなかったし、私が小学校五年生の時に電気が点くまでは、家でランプの生活でした。五年生の時に天草の学校から蒸気発電機というのをもらってきて、分校に付けたんです。それで朝の一、二時間と夜の一、二時間電気が点くようになりました。

当時はどこの家も豚や牛を飼っていました。売るための黒豚です。その豚や他の動物が急に死んだり、人が亡くなるようになりました。私が小学校五年生くらいのことです。母くら

いの若いお母さんは流産する人がすごく多くて、母も流産しました。そしてお葬式がやけに多くて気味悪かったのを覚えています。

多発地帯と知らずに移住

だんだん魚が獲れなくなったり売れなくなったりして、五年生の時、転校することになったんです。水俣市の出月という所に親戚を頼って引っ越してしまっただんです。そこは、水俣病の多発地帯と言われていると後で知りました。父は、「田中建設」という親戚の家の大工仕事を一、二年やった後、「水俣化学」というチツソの下請け会社に行くようになりました。その一、二年は給料取りだったんで、まあ普通に暮らしていたような気がします。

でも父が倒れました。チツソの百間排水溝で水銀ヘドロを掘って捨てる仕事をしていたらしいんですが、その最中に意識を失って倒れました。それから意識がなかなか戻らなくて、市立病院にずっと入院していました。先生から呼ばれて、「意識が戻っても働けない。普通ではいられないだろう」と言われました。母もその当時は弱くて、寝たり起きたりの生活をし

ていましたので、母の泣いている姿を今でも思い出します。でも父は奇跡的に助かったんです。水俣市は小さな街ですので、原因不明で意識がなくなっただような人の噂はすぐに広がります。その当時、チッソという会社は水俣市を支える会社だったので、「会社行き」は凄く偉いんです。私ら子どもながらもさらに、そう思っていました。「会社行きさん」は子どもでも威張っていました。だから「チッソの仕事して倒れた」とは言えなかったんです、水俣市はチッソで賄っていると言われていたから。そのチッソに何か言ったら親戚からも凄く悪く言われます。だから父は水俣で働く場所を失いました。



正月、就職先の名古屋から水俣に帰郷した下の兄・誠とともに、水俣湾に浮かぶ恋路島で、小魚や岩海苔、貝を捕って遊んだ。白い服が本人。手前は妹。一緒に行った左側の同級生、月浦の田上美恵子さん一家も後に全員発病した。

私たち家族は水俣にいますときも水俣病のことなんてほとんど知らなかったんです。その頃は、身内に水俣病患者がいるのをみんな隠していました。それこそ私と歳が同じくらいの胎児性の子どもを納戸に隠していた時代に水俣に行ったから、全然知らなかったです。魚を獲ったらダメとは書いてあったけど、隣の家のおじさんが船で魚を獲りに行くときそれをもらっておかずにしていました。クラスに何人か脚の悪い子とか体の悪い人がいて、留年した子もいましたけど、それが水俣病のせいとか、先生も全然言わなかったのだから知らなかったんです。

父が少し良くなってきた頃、大阪にいる父の姉から、「万博で仕事があるからこっちへ来たら」って言われて、父だけ行きました。でもなかなかお金を送って来ないんで、中学を卒業するまでの二、三年は、地獄のような生活でした。お金がないっていうのは本当に大変なことで、自分の命も捨ててしまおうかっていうくらいつらかったこともありました。

後から聞いた話ですが、父も大阪で一生懸命仕事を探したけど、水俣出身って言うともんな断られたそうです。その頃「水俣病はうつる」とか言われて、毛嫌いされていました。今ではそんなことないっていう人もいますが、当時はすごい差別がありました。身内でもないのに同姓の認定患者がいたっていうだけで、一番上の兄が水俣での縁談を断られました。私

たち兄弟がちょうど年頃だったこともあって、父と母は九州弁を喋らないようにしていました。親戚や田舎から出てきた人とは田舎の言葉で話しますけど、外では片言の関西弁で話していました。私もずっと関西弁で話しているつもりでしたけど、やっぱり差別が恐ろしかったです。父と母は、子どもたちが結婚できなかつたり、将来に響いたらいかんということ、田舎の話はしませんでしたし、「どこ出身」と聞かれても「鹿児島」と言っていました。今考えて偉いなと思えるのは子どものためだったからです。

みんな具合悪くなっても

大阪に来て、父は「大阪亜鉛」というメッキ会社に就職できたんですが、万博が始まる高度成長の時期で、結構お給料も良かったみたいです。でも母はだんだん弱って行って、いろんな病院に行きましたが、原因が分からないと言われました。その頃になってようやく水俣病のことが耳に入ってきたんです。母はずっと頭が痛いし、ほとんど寝込んで動きもおかしい。「これ水俣病やないの」って言えば父に怒られるので、内緒にしてたんです。

第一次訴訟の人たちや川本（輝夫）さんたちが水俣でどんどん声を上げていました。でも私の家では、水俣病ということを絶対に言ってはいけないと父が言っていたんです。母は調べてもらいたいと思っていたようですが、父が反対するので我慢していました。そこへ内田（信）さんという人が大阪に来ている患者を発掘する（見付ける）ために、たまたま親戚の家に来ました。その時に母が水俣病かもしれないから診て欲しいと言ったみたいです。母は父にその検査を受けたいと言いましたが、父は反対して「絶対にさせない」と言いました。

その頃、大阪・芦原橋にそういう運動をしている人たちが集まって、水俣病の話をしたりするところへ母が行き出したので、父も仕方なしに行ったようです。そこでは、島や水俣の思い出話ばかりしていました。うちの父は言い出したら聞かない人です。こんなこととしていて何になるんやということで、水俣に居る時に隣に住んでいた川本輝夫さんと父が仲良しだったもので、父は「関西でもそういうのを立ち上げてみないか」と言われました。でもそのころ母も父も本当に弱くて、会社へ行っても倒れて怪我ばかりしていたんです。目を怪我したり、ふらつきが酷くて仕事もまともに行けないくらいでした。そのころ父は会社でふらついて、すごい高温のところへ落ちて足の踵を溶かしてしまいました。何回も手術して左右の

靴のサイズが違う身体障害者になってしまったんです。

まったく代わるがわる入院するので、長女の私はその度に付き添わないといけない。なん
でうちの親はこんなに弱いんだらうと思いつつ世話していました。

一生懸命に隠して

「あなた、どこの生まれ」って聞かれて「熊本県」って言ったら、「熊本のどこ」って聞か
れるでしょ。それで「水俣」って言ったら、「あの水俣病の水俣なの」って言われるんです。
「生まれは隠せ」って父に言われていたので、鹿児島県と答えるようになったんです。田舎に
帰るのも、水俣から船に乗ったらすぐに着くのに、わざわざ出水からバスに乗って遠回りし
ていました。それだけ水俣が嫌だったんです。水俣にいい思い出がなくて、本当に辛い思い
出しかない。今でも水俣に帰りたいとは思いません。でも島には帰りたいんです。私にとつ
て水俣っていう所は差別が酷くて嫌でした。水俣病って言ったら「怠け者」とか、「お金が欲
しいからやろ」とか「仮病」とか、そういう言われ方をしてたんです。父が裁判すると言う



成人式の後、女友だちと2人で御参りに行った京都の八坂神社で。自分で働いたお金をコツコツ貯めて買った着物だったが、すぐ着崩れして好きになれなかった。

たとき、私たち兄弟は一生懸命隠しているのって言って物凄く反対したんです。今では両親に可哀そうなことをしたと思います。でもその頃は水俣で生まれたこと、育ったことが本当に嫌だったんです。

そんなふうに見られるのが嫌

で私も一生懸命に仕事をしていたんですけど、自分では水俣病ってどの症状のことか、よく分からないんです。自分でもちよつとおかしいのかなって思ったりもしますけど。父も母もやはり普通とは違うって思っていた。父と母が病院の先生に水俣病の検査して欲しい、診て下さいとかいうたら、「あんたらおかねが欲しんだろう」って言われるから言わんといてって思っていました。水俣病だと知られると困ると思っていたんです。でも母がだんだんと弱っていく姿を見たら、やっぱり仕方ないと思えてきました。

大阪に来てから最初の一、二年ぐらいは父と母がまだ元気で、普通の暮らしがどうかでできましたけど、それからは家族全員が元気でいられなくて、どっちかが悪くて入院している。母はいつも部屋の隅っこで震えながら、不安な顔をして泣いていました。父もいつも頭が痛い、頭が痛いと言っていました。家では私たちが二階に、下の部屋に両親が寝ていましたが、父があまりの頭の痛さに壁にガンガン頭をぶつけるんです。それが上まで響いてくるから、「ああ今日もまた病院に行かんとあかんのや」と思うんです。ちょうど水俣病を診てくれる阪南中央病院を父が見つけて近くに引っ越したころです。夜中に病院に行く時、付いて来ないでいって父は言うんですが心配で、冬の寒い夜中でも何でも後ろから付いて行くと、酔っ払いが歩いているような感じでフラフラ歩いてました。それを見るのもつらかったですね。

睡眠薬も一番強い薬を飲んでいました。「セデス」っていう結構強い痛み止めで、水俣病の患者はみんな頭痛持ちなんです。私が慕っていた坂本美代子さん（一九三五～二〇二二年）は、セデスを三袋も四袋もいっぺんに飲むんです。私は、父に「あんたら薬で体悪くしてるんやろ、それ止めたらいいやろ、それ飲むから頭がふらつくんや」なんてひどいこと言っていました。でもそれ飲まないといられないんです。私は、父母だけと思っていいたんですが、関

西訴訟に通いでしたら患者がみんなそうなんです。毎日、セデスをガバガバ飲んでいました。セデスがないと生きていけない。もう中毒かと思うくらい頭痛薬を飲んでいました。本当にびっくりするくらいで、そういう父と母の姿を見て、私は嫌だな嫌だなと思っていました。

父に誰が謝るのか

だんだんと父が弱ってきて裁判するって言ったとき、それは私にとって地獄のようなもので、「せっかく隠して暮らしてきたのになんで裁判なんかするんよ」。「兄弟みんな水俣病のこ」と隠しているやないの。裁判したら分かってしまう」。「(原告が) 岩本と分かったら私の身内ってすぐに分かるやないか」って泣いて、「それだけはやめて」って頼みました。それでも父は、「俺たち田舎ものの、学歴もない爺ちゃん、婆ちゃんの言うことなんか、誰が信じるか」って。「自分たちも人間なんだと認めさせたい。それで裁判する」って言いました。その時は、「そんなんでもいいやん」と言ったんですが、今やったら私も分かります。私も同じようなことをしてきましたから。



母が亡くなった後、弱っていく父・岩本夏義を見かねて、鉄工所を休み妹とともに父を連れて若狭三方五胡へ。父逝去の1年前、とても喜んでくれて最期のいい思い出となった。

その裁判は本当に長い年月かかりました。裁判を始めてから最初の判決が出るまで一二年かかって、その一年前に母は亡くなったんです。母がずーっと可哀そうで、今考えたら悪いことを言ったと思います。母が、「お母さんは生まれてきて何か幸せなことあったの。いつも寝込んでいて、病院と家の行ったり来たりで旅行にも行けないし、化粧気ひとつないし、それで幸せなの」って。それでも母は、「家族、兄弟、子どもたちがみんな近くにいてくれて、それだけでも私は十分に幸せ」って言いましたけど、私はそんな幸せであるのかなと思っていました。

母が死んで、父が家に一人残されましたので私は父の元に帰りました。それから何か月かして地裁の判決が出たんです。ちょっとだけ認められた部分もあったんですけど、見事に負けたんです。それで父は皆さんに「悪かった、俺の力が足りなかった」と言って謝っていました。父が悪いわけではないと私は思いましたが、父は謝って謝って、失意の底で四カ月後に亡くなりました。私は家で一人、この人たちの人生って何だったんだろうと思いました。父は皆に謝りましたが、この人には誰が謝ってくれるんだろうと思ったんです。そしたら私がやるしかない、国の役人をうちの仏壇の前でひれ伏せさせたい。父と母があまりにもかわいそうで、言葉が悪いですけど首根っこ掴んで絶対に謝らせたい気持ちになりました。それであれほど嫌だった裁判に加わった（訴訟継承した）んです。やっぱり血でしょうか。

父と母だって人間として生まれてきたのに、チッソというたった一つの企業のお陰で、水俣病という名前も嫌ですけど、何ひとついいこともなく苦しむだけ苦しみました。水俣病治す薬があれば何も言いません。飲めば治るんだったらそんないいことない。いろいろ発明されて薬がこれだけ発達して、頭が痛ければ頭痛薬、腰が痛けりゃ張り薬っていうのに、水俣病は治らないから、ずっと苦しみ続けなければいけない。

水俣にヘリコプターで来た環境大臣もいたそうです。お祭りじゃあるまいし、水俣をサーッと見て、それで湯の児っていう水俣の温泉で飲めや歌えの宴会して帰っていったと。国も隠したのに。ちょうど高度成長期で、戦争に負けた日本が豊かになる真つ最中の時代でしょう。チツソはそういう国の成長を促進するものを作っていたそうです。だから小さな町の人間なんてどうでもよかったんでしょう。

自分を卑下する生活から

私は、自分では普通の身体だとずっと思っていたんです。でも、水俣病のいろいろな運動をするようになって、小学校、中学校、高校によくお話しに行くようになりました。そこでいろんな体験をしているうちに、「私の身体は普通じゃない」って思い出したんです。ずっと小さい時からこの身体やから、これが普通とっていましたが「違う」って思いました。あまり痛みも感じなくて反応が鈍い。手も震えることが増えて、このごろ酷くなってきて字を書くのも苦手です。またまわりが見えない。目の前しか見えなくて、横は全然見えなくて、



林紡績入社とともに同所の夜間高校林学院に入学して寮生活が始まった。四つあった寮の一つ若杉寮の一部屋に7人で暮らした。手前の2人が入学生で右が本人、両端と後列の右端は寮母、他の4人は2、3年生。入学式の後で。

視野がものすごく狭い。でもこれが普通だと思っていました。近頃、私も水銀の影響があるんやなど、やっと分かるようになって恐ろしいです。これはもう水俣あたりに生まれた者の運命としか言いようがなくて、いまだにずっと続いているんです。でも国も県もチッソを断罪しません。未だにチッソは動いてますから、私たちの生まれ損やなと思っています。

私にも夢があったんです。高校に行って看護婦さんになりたいってあこがれていたこともあります。でも（このような）大学は全然知らない世界

です。私は中学を卒業してすぐ、一五の時に「林紡績」という工場に働きに行きました。朝四時に起きて工場に行き、お昼の一二時まで仕事するんです。そこでご飯を食べて、今度は「林学院」という夜間高校で、六時くらいまで勉強するんです。その頃私は体が弱かったので、もう毎日倒れて寝込んでいるような生活でした。そこの中では病気は私が一番酷かったかもしれないです。自転車に乗れなくなったのも中学校に入った頃からで、まっすぐ前が見えなくなつて、しょっちゅう倒れていました。母が心配していろんな病院へ連れて行きましたけど、普通に診たら元気やし、検査しても何もないし、その頃はなんか訳の分からない「思春期病」って言われました。それがしばらく続いたので、紡績工場も八カ月間しか働けませんでした。寮に住んでいたので、寮母さんが大阪の父に「娘さんはもう働けないから迎えに来て」と電話したんです。

私はあんなに嫌だった大阪に引き取られて、今度は「明色化粧品」という会社に働きに行つたんです。大分昔のことですが、乳液とか化粧水をチューブに詰めていくんですが、今のようないもーションではなくて、小さなビンに乳液を詰めていくんですが、私は手が震えるからいつもこぼれて汚してしまふんです。ちょうどいいところで止められない。「あんな

はよくこぼす」って怒られました。私は単に不器用だからできないんだと思っていたんです。「明色」もあまり長いことは勤まりませんでした。私は何もできない、何でも人より劣っていると思って、自分を卑下する生活がずっと続いていました。なんでこんなにできないんだろう、何してもアカン。頭から足の先まで、ここも悪い、あそこも悪い、足も頭も悪いと、ずっと自分を卑下していました。それがいまだに続いています。

人の三倍努力して

その後、結婚してから長いこと働いたのは鉄工所でした。鉄を触る仕事です。その時、事務員さんたちがスカートや靴を履いているのが、ものすごく羨ましかった。「わあ、あんなのが着たいな」と思っていました。高校にも行ってみたかったです。夜間高校には行きましたが、普通の高校とは違います。だから今、勉強できる人は本当に幸せだと思います。私は高校生活、大学生活に憧れていて、どんなところなんだろうと思っています。高校に通えたらどんな生活ができたんだろうかと、今でも思います。中卒の者の仕事って限られてしまっ

ていて、自分がしたい仕事でも学歴がないからできないんです。今はスーパーで働いてますが学歴詐称なんです。そう言ったら言葉が悪いけど、その当時は高卒しか採ってもらえなかったんです。でも、ちょっとだけ高校に行ってましたので。そうやって仕事に行っても、私は細かい仕事が苦手でなかなかできなかったんです。

今の仕事は、年数がたったら自然に給料が上がっていくんではなくて、試験をして上がっていくんです。たとえばお寿司を作るという試験だと何秒で何個できて、それが綺麗にできたかどうかという評価で給料が上がっていくんです。でも私は手が震えて不器用で、真っ直ぐ綺麗にできないんです。そんなことから腐ってしまって、なんでこんなのができないの、下の人がみんな上がっていくのに、なんでいつまでも下っ端なんだろうと思っていました。でもある日気付きました。人の倍努力しよう。人の倍努力して、人の嫌がる仕事をどんどんしようと思ったんです。そして、試験や役どころでは私の方が下だけど、この人たちより私はもっと頑張って、給料や立場は下でも同等の仕事をしてやろうと思った。他人の嫌がる仕事も一生懸命しました。頭が痛かろうが休みもろくに取らないで人の三倍くらい努力しました。それで二十年も勤めましたから今では偉そうにしています。

そろそろ時間でしょうか。

（実川）

今日は、小笹さんがいつもはお話にならないことを随分お話になったんで、本当はずっと聞いていたんですけれど。

水俣病は治らない

小笹さんはメチル水銀中毒症です。メチル水銀は、凄い猛毒です。しかし圧倒的に多くの人が自分の水俣病をなかなか自覚することができません。その理由が二つありまして、一つはメチル水銀が脳を犯すからなんです。水俣病は脳性の疾患です。脳の表面には顆粒状の神経細胞が詰まっています、それが障害されるといろいろな症状が出てきます。脳性の疾患というのは、例えば目が悪くて目が見えにくいか、耳が悪くて耳が聞こえないではなくて、脳の障害のために耳が聞こえないとか目が見えないということで、こういう人

は症状を自覚するのにすごく時間がかります。それは大脳性の疾患に共通していることです。もう一つの理由は、地域全体で健康被害を受けていますから異常が分かりにくい。先ほどのお話にありましたように、子どもの頃から、人間はしょっちゅう頭痛がするものだと思ってしまいやすいわけです。つまり家族中、地域中でそうだったりすると、それが異常だと気がきにくいんです。この二つ目の理由の背景には、それをあえて知らせようとしなかった行政の責任が非常に大きいのです。

ですから小笹さんも、著名な原田正純先生（一九三四年～二〇一二年）の診察を受けて、小笹さんがいろいろ訴えることが物心ついた頃からあったことがお父さんやお母さんへの聞き取りで判明して、原田さんは「胎児性水俣病」と診断しました。水俣病患者というのは、胎児性、急性劇症型、慢性というように分けて言いますが、綺麗に分かれる訳ではないんです。つまり、お母さんのお腹の中にいる時からメチル水銀の影響を受けて生まれてくるだけでなく、生まれた後も不知火海の魚を食べるから、後天性のメチル水銀中毒にもなるわけです。こういう人たちが多くて、どこかでスパッと切れるわけではない。水俣病では医学の方が後から追いかけてきた。つまり昔からその病気が分かっている、診断し対処

したのではないのです。

原因企業のチッソが流したメチル水銀は非常に恐ろしい毒物です。四大公害裁判——四大公害病という言い方は非常に不正確な言葉ですが、この中には阿賀野川水俣病、不知火海水俣病のほか、イタイイタイ病と、大気汚染による四日市ぜんそくがあります。イタイイタイ病の原因物質はカドミウムです。カドミウムが体に入って行っても、カドミウム腎症というレベルでしたらカドミウムの摂取が止まると腎臓は元に戻ります。ところがカドミウム腎症が進むとカルシウムの代謝が上手くいかなくなって骨が折れるようになりますから、骨が折れて「痛い痛い」というのが病名の由来で、そうになると骨が元には戻りません。カドミウム腎症のレベルだったら回復します。ところが水俣病の場合には、それが慢性で軽症であろうが、傷つけられた脳の神経細胞は元に戻りません。神経細胞は母胎にいる時につくられたものを少しずつ使っていくんです。それで死ぬまでに使い切ってしまうことはないのですけれども、いずれにしろたくさん傷つけられた細胞が元に戻るわけではありません。

日本中で一番被害者の多い公害は大気汚染ですけれども、空気の綺麗などところに行つて数カ月暮らせばだいたい回復します。もちろん人はどこでも暮らせるわけではないので、たく

さんの人が亡くなっていますが、転居して回復した人もたくさんいます。しかし水俣病は、メチル水銀中毒は回復しません。それは脳の神経細胞を壊すからです。しかもメチル水銀は胎児にも行ってしまう。胎児性の水俣病です。うつる訳ではないんです。患者の人が「うつる」と言われて差別されたと言いますが、うつる病気の患者だったら差別されてもしようがないということではないはずです。つまり水俣病になった人たちが怒っているのは、この病気で、こんなひどい目にあっているのに知らないのか、そんなふうにしか認識していないのかと、傷ついたからです。このことは、先ほどのご挨拶の中でもお話がありました。

胎児性という警告

人間のつくった毒物によって胎児まで傷つけられたというのは、水俣病が世界中で初めての事例だったんです。哺乳類の体というのは大変よくできていて、胎盤というのはただ単に栄養と老廃物、酸素と二酸化炭素の交換をやっているだけではなくて、毒物や細菌は胎児にうつさないというプラセンタバリア、胎盤障壁と言われる機能があります。ですから重症の

水俣病が次々に見つかった一九五〇年代後半に、具合の悪い子どもたちがたくさん生まれ、流産をする人がたくさん出ていましたから、これもチツソの排水の影響ではないかと考えた人もいたようですけど、医者はそんなことは考えませんでした。それは胎盤障壁の存在を知っていたからです。今でも胎盤障壁の存在を疑う人はいません。ではなぜ、メチル水銀は胎盤を通じて胎児の神経細胞を壊したのか、これが大問題です。どうしてでしょうか。それはメチル水銀は人間が作った毒物だったからです。そうとしか考えようがない。

例えばトリカブトやジャガイモの芽のように自然界にある毒物を間違って食べた場合の生理的な対処を、哺乳類は何億年、何千万年と少しずつ胎盤が進化して、いわゆる胎盤障壁を獲得してきたわけです。ところが、メチル水銀がこんな濃度で私たちの環境中に存在するなどということはありませんでした。その製造が始まるのが一八世紀の半ばくらいなので、まだ二〇〇年くらいです。何千万年にとっての二〇〇年は瞬間です。対処なんかできません。ですから人間が作った新しい物質はみんな危ないんです。

今年（二〇二五年）二月の共同配信で各紙に出ていましたけれども、アメリカのニューメキシコ大学の研究チームが、亡くなった五二人の脳を解剖して脳の中のマイクロプラスチック

クを取り出したら、一人当たり平均してプラスチックスプーン一本に相当する量が入っていて、後の時期に亡くなった人の方が、その量が多かったんです。なんでマイクロプラスチックが脳にまで入っているのか。脳は脳で毒物を入れにくくしている障壁があります。でも人間が作った物だから効かない。それでマイクロプラスチックの影響について急速に研究が進んできています。私たちは、のんきなことに科学に全幅の信頼を置いて、自分たちを「霊長類」とか言って安心しきっていた、そのしつぺ返しが来ています。このペットボトルの中にもマイクロプラスチックが入っています。私たちが手に触れるあらゆるものはプラスチックになりました。木に直接触れるなんていうことはまずありません。この机の表面にもプラスチックが塗られていて、わずかに削られていく粉がマイクロプラスチックになる。そのために肝臓ガンの発生確率が数百倍になったという論文もありますが、プラスチックの代表だった塩化ビニールの添加物を作るために有機水銀が流されたので、要は水俣病と同じ原因と言っています。

チツソを誘致した水俣

ところで、なぜ小笹さんが嫌な思いを水俣でしなければいけなかったのか、それをたどってみたいと思うのです。まず水俣という街はどういう所か、というところから考えなければなりません。主に色川大吉先生（一九二五年～二〇二一年）の研究をかいつまんでお話しします。水俣という所は、北には三太郎峠があつて熊本に出にくい。それから南側にもなかなか通りにくい所があつて、鹿児島の方から行きにくい。言わば陸の孤島みたいな所だったんです。ですから珍しいことに中世以降、實際上統治していたのは三つの家だけなんです。その家がどこに仕えているか、秀吉になったら秀吉に、細川になったら細川に従っていますけれども、実際の統治者は替わつていない百年一日を経過してきた土地でした。

明治になつての郡都でもありません。ご存知のように、近代以前の圧倒的に多くの人たちは村社会に暮らしていましたが、明治のころは現在の都道府県単位の中にもう一回り小さい「郡」を設けていましたけれど、その中の中心都市ではありません。その意味では水俣は辺境でした。都である東京や京都から遠い何もない所です。ただ、魚がとともよく獲れる所です。

た。しかし大きな船は着けにくい所でした。よい港なんかありませんでした。ですから明治維新が起こった後に、銀主（ぎんし）、つまり当時の金貸し、土地持ちの息子たちは、このままだったら、この村は没落してしまうから工場というものを誘致しなければいけないと考えました。

日清日露で勝っても、水俣の実際の暮らしはまだ江戸時代とほとんど変わっていない時代です。そこに初めて工場を建てたのが野口遵（のぐちしたがう、一八七三年～一九四四年）です。父親は野口之布（のぐちゆきのぶ）という加賀金沢藩の下級武士でした。その頃の下級武士というと黒船来航もあって、天下国家を懸命に論じる人が多かったのですが、金沢藩では尊王攘夷派は佐幕派に負けて之布は投獄されています。やっと明治維新になって、之布は一家を上げて新政府に尽くそうと、生まれたばかりの遵を連れて東京に移って来ます。加賀藩の下屋敷、今の東京大学正門近くに居を構えます。遵は大変優秀で、父親の影響もあったんでしょうが、世のため国のため、貧しい農民の暮らしをいかに豊かにするかと子供のころから考えていたようです。それで東大に入ります。その頃の東大というのは成績が優秀だったら入れるというような生易しいところではありません。地域社会における人格評価を得ら

れないと、とても入れなかったようです。そして電気科に進みます。電気化学を今の何かに例える能力が私にはありません。その頃、電気化学と言ってみたところで一般の人にはまったく通じなかった言葉です。それほど先進的でした。

卒業後、野口は箱根登山鉄道で運転手をやってみたり、外国の化学企業の日本支店に勤めたり、いろいろな事を経験しています。それで最初に自分たちでやり始めるのが、仙台は三居沢（さんきよざわ）の水力発電を利用する小さな工場を造って農家の次男坊三男坊を集めて、日本で初めてカーバイドを作ります。カーバイドがどれだけ重要なものだったのか、今の人にはまったく分からないでしょう。電気を使って作ったカーバイドを水に入れるとアセチレンガスが出ます。これに火を点けると灯りになります。ロウソクは少しの風でも消えてしまえますけど、ガスランプは風では簡単には消えません。これがどれだけ人々の暮らしを変えたか。自信を持った彼は満を持して九州の南の方に発電所を作ります。

鹿児島県の曾木の滝という所の地形を利用した水力発電所です。と言ってもダムを作ったわけではないんです。パイプを通して、その先にタービンを入れて水を通して発電をするんですが、売電が目的ではありません。まず、その電気を近所の金山に売って定常収入を得ら

れるようにします。鉾山では酸素を消費しない明かりは大変ありがたいですから。それを原資にしてやりたかった化学工場をいよいよ始めようとしていました。

そこに、水俣の青年たちが誘致にやって来るわけです。チッソ水俣工場は誘致工場だったんです。最初、野口は、葦北郡都だった少し北の佐敷がいいか、それとも、良い港があった南の米ノ津のどちらかと考えていましたが、水俣まで長く要る分の電柱は自分たちが提供するから、土地も安く提供するから、とにかく水俣に来てくれという誘致で、野口は気をよくして水俣に工場を造りました。それから、どんどん拡張していくわけです。どんどん人口も増えて、熊本よりも先に電気が点りました。ガスランプも灯りました。辺境だったところに天皇までやってきます。嬉しかったでしょうねえ。水俣の人たちにとっては、自分がチッソの街、水俣の生まれであることが誇りになったんです。

苛烈な差別・偏見・敵視のもと

そこに、チッソが原因ではないかという病気が発生した。しかも水俣病が発見されたのは

昭和三十一年ですけれども、漁民たちの暮しは二〇年代の末頃から急激に貧しくなります。排水の影響で魚が捕れなくなってきたからです。ですから、みすばらしかったでしょうし、臭かったでしょう。私たちは不潔であることが嫌いですね。なんでこんなに嫌いなんですか。自分たちもつい最近まで不潔だったのに。ですから、水俣奇病患者は自分たちのアイデンティティーを傷つける存在に見えて、激しい偏見や差別的のようになっていきました。

ちなみに新潟水俣病の原因企業、昭和電工の鹿瀬工場は阿賀野川のずっと上流の山の中、福島県近くにあります。そして患者が出たのは日本海のすぐ近くです。加害者と被害者が一緒に住んでいる街なんありません。水俣は一緒に住んでいる街でした。ただ、加害者の人たち、意思決定をする人たちは、水俣工場に勤めている人たちの中の〇・一％以下の人数の、東京本社採用の社員、超エリートです。その人たちは、不知火海沿岸で暮らす小笹さんのような人たちの生活がまったく見えてなかった、見ようとしなかった。魚を主食にしている生活なんてまったく想像ができなかった。彼らは水俣で東京と同じ暮らしをしていたんです。こういう人たちの中から水俣病患者は出ていません。

水俣工場最盛期、だいたい五千人くらいが働いているんですけど、そのうちの四割ぐらい

は水俣工場採用の工員です。先ほど小笹さんが威張っているように見えたというのは、社員と工員の子どもです。第一次大戦以降チツソが新興財閥になると工員の収入は安定したので、農民や漁民よりもちよつと新しいものが着られたり買えたり、ラジオもあつて標準語に近い言葉を話せたりしたので、そんなふうに感じられたのではないでしょうか。

工場で働く六割の人はどうだったかというと、苦しい生活でした。臨時工だったり、小笹さんのお父さんのような下請けの労働者だったりした人たちです。工場労働に加えて、魚を捕ったり畑を耕さないと暮らせません。そういう構造の中で、水俣病の原因がチツソ水俣工場排水中のメチル水銀だと分かっても放置されてしまいました。放置したのは、単なるチツソの意思だけではなかったことも、はつきりしています。

私たちも加害者だった

奇病発生の公式確認から三年経った一九五九年に熊本大学の研究で原因はチツソによる水銀化合物だと判明し、厚生大臣が閣議で何らかの処置を取らないといけないと思っていると

発言します。そうすると時の通産大臣が、「何を言っているのか、チッソの水俣工場を止めるなどということは口にするな」と罵倒します。その人が次の首相になる池田勇人です。その時の非常に重要な意思決定の場面の首相は岸信介です。そういう時代です。この頃の日本のGDPは現在のGDPの何パーセントくらいか。まだアジア諸国とそれほど変わらない頃ですから、いかに工業製品を輸入せずに国内で作って輸出するか、国を挙げてやっていました。だからこそ、「貧しい漁民の何十人かの奇病など大したことではない」と大臣から聞いた記者もいました。

水俣病がどういう問題だったのか。ただの公害という言葉で片付けられるのか。私はとても疑問です。チッソだけではないんですけど、加害者たちが一生懸命守ったのは、水銀を流している所がアセトアルデヒド製造工程だったからです。当時、アセトアルデヒドから主に何を作っていたかという、塩化ビニールの可塑性です。塩化ビニールは、柔らかくするための可塑性がないとバケツや洗濯バサミ、ホースに加工出来ません。ですからその頃の塩化ビニール商品のすべては、チッソの作った、つまり水銀を流したお陰で手にできた商品でした。ご存知のように塩化ビニールは、私たち人類が広く使い始めた最初のプラスチックです。

今やそのプラスチックが私たちの病の原因にもなっています。水俣病というのは人類の重大な勘違い、思い違いによる病、その一つの警告のように私は受け取っています。

ここ大谷大学の建学の基になっているのは仏教の精神かどうかがついています。私たちはもうそろそろ、近代主義とか合理主義とか科学への盲信から足を洗わないと、いつまで経ってもこういうことを繰り返さなければいけないのではないのでしょうか。今日こちらには学生さんや、教鞭をとっていらっしゃる方もきてくださっていると思いますが、私たちがこの間、盲信してきた科学とか正義というものを、もう一度「本当にこれでいいのか」と確かめていただくような、例えば仏教精神を元に現代の常識を再検討始める、そういう機会に是非していただきたいと思います。つまり、このことへの警告が水俣病だったんだと思っています。たらないのではないかと思っています。

本日は、通常二枠三時間ぐらいでお話する内容を四〇分に圧縮していますので、かなり飛ばしていますし、小笹さんも随分飛ばしているところもありましたので、お分かりいただけないところが多かったのではないのでしょうか。

その辺も含めてご指摘いただけたら、私たちの分かるところで、できるだけお話したいと

思います。ありがとうございました。

私たちも被害者に

(司会)

小笹さん、実川さん、どうもありがとうございました。水俣病というものが我々人類にとって様々な警告を発したものだというご発言も今ほどありましたし、そこで我々が信じてきたものが果たしてどうだったのかということを、改めて考え直す必要があるという最後のご発言もありました。さあ、いかがでしょうか、せっかくの機会ですので、皆さんの方からぜひ聞きたい、確認したいということがありましたら、ご発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。

今日は実川さんの方からとてもいい資料をいただいております。不知火湾の地図も後ろに載っておりますし、中には様々な水銀による汚染、そして近年の我々人類が犯してきた、自分の利便性、便利さのために犯してきた様々な過ちが生み出したものが紹介されてお

ります。実川さんに、もう少し紹介いただけたらと思います。

（実川）

はい。地図を見ていただくと、そこにダイヤモンドのような形をしている水俣の拡大地図がありますが、真正面に獅子島とあります。ここが小笹さんの生まれた島で、その下の方に足が出ているような形のところがありますが、この足の間くらいの、二つの足の間にある部落で小笹さんがお生まれになったことをご紹介しておきます。

メチル水銀による健康被害というのは、実はここにいらっしゃる方たちとも、無縁ではありません。もちろん水俣病ほど酷くはありませんが、これから子どもを産む可能性のある女の人も、こちらには何人かいらつしゃいますが、先程お話ししましたように、デンマークの非常に優秀な環境医学者フィリップ・グランジャンの研究で、お母さんの毛髪には僅かですけれど水銀が含まれ、その値の高いお母さんから生まれた子どもほど、脳の神経細胞の活動が活発ではないということが分かっています。ですから妊娠可能性のある人、特に妊娠後期が重要ですが、本マグロなんか食べないでください。加えて、国際的に捕鯨が禁止されていない

鯨、つまり歯を持っている小さい鯨は水銀値が凄く高いです。それを食べても水俣病になるほどの水銀値ではありません。けれど食べたお母さんの血中にメチル水銀が回っていると、胎児の成長過程の神経細胞を傷つけます。そういうことが分かっています。

私は外国人の記者から、なぜ日本人は水俣病を知っているのに、水銀の恐ろしさをこんなに知らないのかと何回か言われました。私はもう七〇歳の男ですから、本マグロを食おうが、鯨を食おうがいいんです。小笹さんも妊娠する可能性はありません。ですから年齢とか性別によって、食べ物のお安全性の基準は変えた方がいいと三・一一（東日本大震災の福島原発事故）の時に言われましたけれど、本当にそのとおりだと思います。

科学文明を見直すためにも

（司会）

ありがとうございます。小笹さんも加えてお話しませんか。

（小笹）

今日は私も何かを飛ばして、今までお話をしたことがないことをお話したような気がします。七〇歳を過ぎましたら、自分が辛かったとかいじめられたとか言うのが嫌になってきました。水俣のことは伝えていけないといけない。でも自分はもう少し前向きに人間らしく、後の何年かを生きていきたいと思っています。今日は自分が一番辛かった話をしてもらわないと思いました。自分が中学校の時に先生に虐められて辛かったとか、そんな話もしてきましたけど、今更そういう話をして、もうその先生もきつと亡くなっているだろうし、もういいと思ってそういう話はやめました。ちょっと伝わりにくかったかもしれませんが。

この病気は治らない、一生抱えていけないという病気で、患者になった時の人生がもうみんなすっかり忘れているんです。水俣病がどういう病気で、患者になった時の人生がどんなに辛いかなんて分かってもらえません。父母や周りの人が「やっぱり私らは死なないと楽にならない」ってよく言っていました。私も今そう思っています。この体のしんどさや、頭の痛さ、ふらつきから楽になれるのは死ぬしかないんだろうと思います。でも自分のこれから先の人生は楽しく生きたいと思います。私は今、小学校五・六年生の授業で滋賀県に呼ば

れて毎年行っています。そこで今日のように自分の体験を話したりしてますけれど、ご要望があつたら伝えていきたいと思っています。

（司会）

ありがとうございます。ご質問いかがでしょうか、はい、どうぞ。

（参加者）

小笹さんにお聞きます。水俣病の本筋の話ではないんですが、小笹さんが水俣の中学校を卒業した後、林紡績に就職したというお話がありました、この会社は、当時、愛知県の一宮にあつた林紡績のことでしょうか。

（小笹）

私たちが中学卒業のころは、糸を作る紡績工場が日本全国にあつて、特に愛知県とか名古屋の方は多かつたんです。それで中学二年生ぐらいから、先生が卒業する女の子を探してい

たんです。紡績工場への集団就職は「金の卵」って言われてました。一四歳で中学卒業してすぐ親元を離れて、集団就職列車に乗って行くんです。そこで働いて胸をやられて亡くなつていくとか、昔そんなすごい映画もありました。私が行ったのは愛知県丹羽郡扶桑町です。今は住所が違いかもしれませんが、今でも覚えています。

（参加者）

そしたら夜間の誠和学校に行かっただけでしょうか。

（小笹）

だいたいその頃、どこの紡績会社でも大概、夜間学校が付いていたんです、高校卒業の資格が取れる学校です。大きな工場でしたので、高校も短期大学も付いていました。私はそこに八カ月間だけ高校生として行きました。

(参加者)

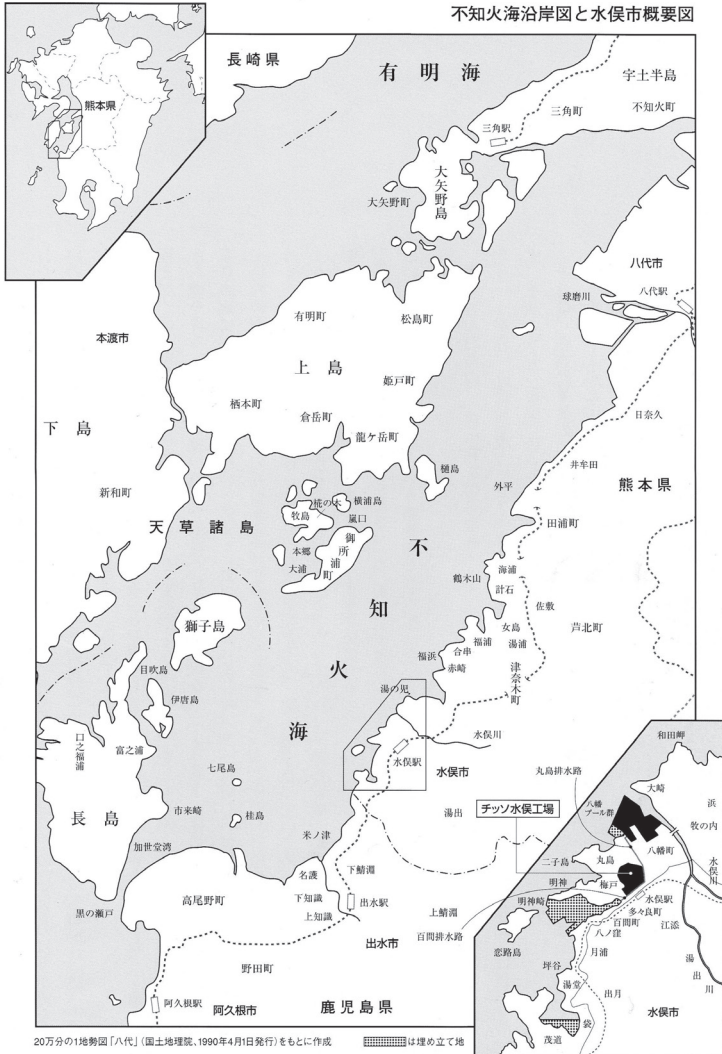
ありがとうございます。

(司会)

どうもありがとうございました。時間も参りましたので、これでお二人の先生方のお話を閉じさせていただきますが、改めて、先ほどの実川さんの地図の裏には、明治からの水俣病事件に関連する長い歴史が書かれております。それを見ておきますと、先ほど仰られていた、我々が求めてきた科学とか文明というものが私たちの命や健康を脅かす脅威になってきている。それに対して私たちの命の尊厳や健康を取り戻すためにずっと闘ってこられた歴史がこの中に見て取れます。そして、そこに出てくる「水俣」という言葉は、これを見る限り地名というよりも、何かもっと重く重要なものを我々に投げかけてくれる一つのメッセージとしてあるように私は受け止めてしまうんです。とするならば、やはりこれから先、私たちは水俣をどういうふうに受け止めていくのかということを改めて考えていかなければならないと思います。本日は本当に貴重なお話を、小笹さん、実川さんにしていただきまして、改め

て知ること、そして考えていかなければならないことの重大なテーマをいただいたように思いました。改めて皆さん、お二人に盛大な拍手を送っていただいて、本日の全学学習会を終わりたいと思います。どうもありがとうございます。

不知火海沿岸図と水俣市概要図



講師略歴

小笹 恵（おざさ・めぐみ）

水俣病患者、元・水俣病関西訴訟原告。

一九五四年、水俣沖の鹿児島県獅子島生まれ。一九六五年、一家で水俣市出月へ移住。集団就職したものの体調を崩し、大阪へ転居していた家族のもとに戻る。一九八二年、父が「チッソ水俣病関西訴訟原告団」の原告団長、母は原告となり、チッソ、国、県を被告として大阪地裁に提訴。一九九四年、他界した母・父の訴訟を継承し原告となる。「水俣病記念講演会（京都）」や「水俣・京都展」などで講演。小学校でも体験談を語る活動をしている。

関連出版物には、講演録「棄てられて」（二〇一九年「水俣フォーラムNEWS」四一号所収）、「水俣病を思ひ―岩本夏義回想録」（二〇二一年「水俣フォーラムNEWS」四二号所収）がある。

実川 悠太（じつかわ・ゆうた）

認定NPO法人水俣フォーラム理事長、明治大学非常勤講師。

一九五四年、東京都新宿区生まれ。高校在学時に水俣病患者支援運動の高校生グループに参加。編集・制作プロダクション勤務ののち、フリーランスの編集者に転身。多くの書籍・雑誌編集を手掛ける。水俣病歴史考証館展示制作スタッフ、大学非常勤講師、水俣フォーラム事務局長などを経て、二〇一五年、水俣フォーラム理事長に就任。

著書には、編著『水俣から―寄り添って語る』『水俣へ―受け継いで語る』（岩波書店、二〇一八年）、著作『「水俣」と向き合った半世紀―水俣フォーラム誕生前史』（二〇二三年、『Journalism』朝日新聞社）などがある。

人権センター叢書 vol.34

水俣病
——被害体験と加害構造

小笹 恵
実川 悠太

編集・発行 大谷大学人権センター

〒603-8143 京都市北区小山上総町

印刷 株式会社あおぞら印刷

発行日 2026年3月31日



OTANI
UNIVERSITY